

## 南フランス・ガール県東部のロマネスク聖堂（1）

中川久嗣

### Les Églises Romanes dans le Département du Gard; La Vallée de la Cèze.

NAKAGAWA Hisashi

#### Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent à l'est du département du Gard, surtout autour de Pont-Saint-Esprit et Bagnols-sur-Cèze. Ce pays correspond approximativement au nord de ancien diocèse d'Uzès, et aujourd'hui au nord de l'arrondissement de Nîmes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

前稿まで南フランス・ロゼール県のロマネスク聖堂を取り上げてきたのを引き継いで、本稿からは、新たにガール県のロマネスク聖堂について見てゆくことにしたい。ガール県（Département du Gard）は、いわゆるラングドック地方において、ロゼール県のすぐ南に位置し、プロヴァンスのブーシュ＝デュ＝ローヌ県からはローヌ川をはさんでちょうど対岸にあたる。現地での発音は、どちらかと言うと「ギャール」に近いのかも知れないが、わが国においては、例えば「ポン・デュ・ガール」のように「ガール」という表記が一般的であるので、そちらを採用した。

この地域は、ローマが進出する以前には、紀元前3-4世紀頃にヨーロッパ中央部から移動してきたと言われるケルト系ガリア人のヴォルク・アレコミク（ウォルカエ・アレコミキ）族が定住していた。紀元前218年、第2次ポエニ戦争においてピレネーを越えて北進して来たハンニバル率いるカルタゴ軍とローヌ川を挟んで対峙し、わずかばかりの抵抗を示したのは、このヴォルク・アレコミク族であったという。ローマ時代には属州ガリア・ナルボネンシスの一角を構成し、ニーム（古代名ネマウス）などが繁栄した。紀元前118年に、時の執政官ドミテ

イウス・アエノバルプスによって造られたローマの道ドミティア街道は、ガール県では今のボーケールから西進し、ニームを經由して南下し、アンブリュスム（今のエロー県）やナルボンヌなどを通してヒスパニア方面へと続いていた。

ローマ帝国瓦解後は、5世紀初めにヴァンダル族と西ゴート族、そして8世紀にはイスラームがラングドックに侵入してくる。西ゴート王国は418年からトロサ（今のトゥールーズ）を首都としてイベリア半島から南フランス一帯を支配した。しかし6世紀に入ってフランク王国と争った結果、首都をトレドに移して南ガリアから撤退した。8世紀のイスラームの侵入に際しては被害を受けはするが、ローヌ川の東のプロヴァンスに比べると、ラングドックではイスラームの破壊行為はそれほどでもなかったようで、むしろ彼らをガリアから駆逐しようとするカール=マルテルの軍による破壊行為の方が深刻であったとも言われている。732年の有名なトゥール=ポワチエの戦いの後も、イスラーム勢力は南ガリア（南フランス）にとどまり、略奪行為を続けていたが、752年にはニームが、759年にはナルボンヌが時のフランク王ピピン3世（短軀王）らによって解放されている。この時代、すなわち6世紀の西ゴート王国時代からカロリング朝フランク王国の支配する9世紀頃までの間、ラングドックは「セプティマニア」（Septimanie）とも呼ばれた。9世紀のノルマン人の来襲、10世紀のマジャール人の進出など困難な時代が続くが、中世になるとニーム、ユゼス、アレスなどに割拠していた在地封建領主たちの地域支配が進み、その後はより大きな封建領主であるトゥールーズ伯の勢力圏内に入った。しかし11世紀以降の異端カタリ派の拡大とそれに対するアルビジョワ十字軍遠征の結果、ラングドックは13世紀にフランス王国に併合された。16世紀の宗教戦争の際には、とりわけラングドックの北部地域において、プロテスタント（ユグノー）勢力による聖堂の略奪・破壊などの被害が大きかった。また18世紀初めには、同じようなプロテスタントの反乱であるカミザール戦争が、ラングドック北部のセヴェンヌ地方を中心に起こっている。なお、12世紀以来続いていた、ラングドック（とりわけ南部のルシヨン地域）を巡るスペイン、すなわちカタルーニャやアラゴンとの領有争いは、16世紀になって一応の決着に至り（1659年のピレネー条約）、政治的にはとりあえず安定することとなった。

本稿ではガール県東部（およそ現在のニーム郡 Arrondissement de Nîmes）の北寄りの地域、すなわちポン=サン=テスプリからバニョル=シュル=セーズ周辺に点在する中世期のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問調査し考察を加える。

取り扱う聖堂は、「ロマネスク」といっても厳密な時代の限定はせず、11-12世紀のいわゆる盛期の「ロマネスク」期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なり一部分がその時代のもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。

聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号（30）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。

聖堂は、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。また聖堂内にある« chapelle » は「礼拝室」とし

た。個々の地名や聖堂の名称については、現地の慣用のものを採用した。

採りあげる聖堂は、基本的にすべて筆者が直接訪問・調査したものである。私有地であったりアクセス困難な場所にあるなどの理由で訪問出来なかった聖堂には▲を記した。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ (<http://nn-provence.com>) で閲覧可能である。なお略記号と参考文献リストは最後にまとめて記した。

### 30.1 バニョル=シュル=セーズ (Bagnols-sur-Cèze) とその周辺

#### 30.1.1 ポン=サン=テスプリノサン=ピエール教会

##### (Église Saint-Pierre, Pont-Saint-Esprit)

ポン=サン=テスプリは、ガール県北東端のローヌ川沿いに位置する。この場所はちょうどローヌ川やアルデッシュ川を隔ててヴォークリューズ県・アルデッシュ県と接する3つの県の県境にあたる。古くからローヌ川の主要な渡河地点のひとつであったこの街は、もとは「サン=サテュルナン=デュ=ポール」と呼ばれ、10世紀頃からクリュニー修道院の修道士たちを受け入れてきた。その後、1265-1309年にローヌ川に架かる919メートルの長い橋が建設され、その橋にちなんで街の名前も「聖霊橋」(Pont-Saint-Esprit)と呼ばれるようになった。ローヌ川とこの聖なる橋を見渡すテラスがこの街の川岸に造られており、そのテラスの北側にはサン=サテュルナン教会(Église Saint-Saturnin)、南側にはサン=ピエール教会と、2つの聖堂がローヌ川に沿って、およそ50メートルの間隔を開けて並んで建っている。

西ファサードを比べると、サン=ピエール教会の方が一見して新しいもののように見える。三角形の切妻を、立溝の付けられた4つのイオニア風ピラストルが支え、全体がギリシア神殿のような18世紀の新古典主義様式のファサードである。しかし、聖堂の建物自体が古いのは、このサン=ピエール教会の方で、もとはクリュニーによって10世紀に建てられた小修道院(Prieuré de Saint-Saturnin-du-Port)がその前身である。現在のユゼス地方で勢力のあったサブラン(Sabran)家のジェラル(またはジェロー。ユゼス副伯の息子)が10世紀半ばの948年にクリュニーにこの土地を寄進したのがきっかけで、この修道会が南フランスに進出することとなった。彼らは952年に最初にこの地にやって来たが、その進出が本格的となるのは、988年にクリュニーの第4代修道院長マイユール(Mayeul)がサン=サテュルナン=デュ=ポール小修道院の院長としてギヨーム・ドゥ・ヴォルピアーノ(Guillaume de Volpiano)を送り込んでからのことであった(ただし彼は翌989年にはディジョンのサン=ベニーニュ修道院長に転出している)。13世紀にはこのプリウレ(小修道院)には30名ほどの修道士がいたと言われる。

12世紀(1180年頃)建設のサン=ピエール教会は、長さおよそ40メートル、幅16メートルで、4つのベイからなる身廊の東端に半円形の後陣が付けられていた。その後陣部分は13世紀

には崩れてしまい、その他の部分も時代と共に傷みが激しくなり、1779-1784年に建て替えが進められた(クロワトルは1772年に取り壊された)。新しい聖堂が完成して6年後の1790年にはフランス革命の結果、廃堂となった。その後は倉庫、学校、あるいは車庫などとして使用されたが、今日ではポン=サン=テスプリのコミュニンの所有となり、時おり美術展などの各種イベントに利用されている。



30.1.1. Pont-Saint-Esprit

ロマnescク期の面影は、聖堂の北側の側壁に認められる。いくつかの太い扶壁と塔のような大きな方形の張り出し、そしてそれらの間の壁面に残る高さのある3つの半円形の壁アーチが見える。そのうち東側の2つの壁アーチは、上部のタンパンを2つの細長いピラストルが支えるという形になっている。Victor Lassalleによれば、それがニームにある古代のディアヌ神殿(Temple de Diane)内部の西側のファサードの仕様と類似しているという。北側の側壁にある塔のような張り出しの上の方には、ロマnescク期のものと思われる渦巻き文様の石が3つほど埋め込まれているのも見える。ひとつは張り出しの角部分、残りは上の方に開けられた方形の窓の向かって右側で、この窓の上には古い時代の半円頭形の窓のアーチの名残が残っている(窓自体は埋められている)。後陣は12世紀のものが崩れた後、1303-1308年にかけてゴシック様式で再建された。外側は五角形となっているが、現在はその北側部分しか見ることができない。その北東面には尖頭形の大きな窓が開けられている。現在の鐘塔は18世紀の方形のもので、身廊部の南東端に建っている。南側の壁の上部には、身廊北壁と同じように半円頭形の窓がいくつか残されている。身廊の上には、その東端に18世紀の丸い大きなドームが載っている。大きなドームの上に小さなドームが重ねられていて、まるで日本の正月飾り餅のようである。

聖堂内部は、18世紀の改築・再建によって、まったく新しいものとなっている。4つのベイからなる広くて背の高い身廊に南北の側室(祭室)が付く。大きな丸いドームが載るベイの東側が、半ドームの架かる後陣で、4つの平たいピラストル(付け柱)の上に3つの半円アーチが並ぶ。この18世紀の後陣部は、外部における五角形の後陣のすぐ内側なのではなく、外部の後陣部とは無関係にそこから離れた位置に造られている。身廊の西端(つまり西ファサードの内側)には、横長の三心アーチの上に、バラスターが並ぶ優雅なトリビューン(2階席)となっている。

サン=ピエール教会のすぐ北に並んで建つサン=サテュルナン教会は、もとはやはりロマnescク期(あるいはそれ以前)にさかのぼる歴史を持つが、何度か改修されたあと、15世紀に完全に建て直された。さらに19世紀にも修復工事が行われている。建物全体は南仏ゴシック様式である。広い単身廊形式で、その南北両側に礼拝室が並ぶ。西端はナルテクスである。3つのベイからなる身廊の天井は4分交差リブ・ヴォールトである。後陣は、内部は七角形で、その中

中央の3面にはトレーサリーで装飾された尖頭形の縦長の窓が3枚開いており、ステンドグラスがはめられている。後陣の外側は、聖具室や小礼拝室などが並んでいて、その様子をはっきりと見て取ることはできない。サン=ピエール教会のものよりも高さがあるが、保存状態の良い鐘塔が聖堂の南西角（西ファサードの南側）に建っている。西ファサードには9段の石段を登ったところに、尖頭形のポルタイユ（扉口）が開いている。その扉の上にはゴシック様式の幾重ものヴシュールが架かっている。聖堂の南東側にも大きなポルタイユがあって、こちらも西ファサードのものと同様に9段の石段を登ったところに扉が開く。扉の上のヴシュールは簡素であるが、タンパン部分にはゴシック的な線刻彫刻が見られ、扉口の中央にはトリュモ（中央柱）が付けられている。

ポン=サン=テスプリの街には、旧市街のサン=ジャック通りにある12世紀の「騎士たちの家」（Maison des Chevaliers）の中に、「ガール県宗教芸術美術館」（Musée d'art sacré du Gard）がある。「騎士たちの家」は、サン=ジャック通りに面した西の壁の2階に、13世紀頃のものと思われる半円アーチの組み合わされた窓（柱頭彫刻付きの小円柱に両側を支えられた大きな装飾彫刻付きアーチ、そしてその中に、やはり柱頭彫刻付き小円柱に受け止められた2つの小アーチが入れ込まれている）がある。美術館には、6-7世紀頃のサン=ヴィクトール=ドゥ=カステル礼拝堂遺構（バニョル=シュル=セーズの北西約5キロのオー・カステルの山中）にあったという初期キリスト教時代の祭壇（autel paléochrétien de Saint-Victor-de-Castel）を見ることができる。7世紀頃のものとして、かつてはバニョル=シュル=セーズの「レオン・アレグル考古学博物館」に置かれていた。この立方体（方形）の石の祭壇（あるいは祭壇が置かれていた台座）は、四隅をそれぞれ円柱で縁取られている。その正面にあつては、縦筋模様の施された左右の柱とその上に架かる半円アーチに囲まれた中に、縦軸が「P」の形をした大きな十字架が彫刻されている。この「P」は、キリストを意味する「クリスム」を構成するギリシア語の「カイ（X）」と「ロー（P）」のうちの「ロー」であり、初期キリスト教時代にしばしば見られるものであるが、その「ロー」を「カイ」とではなく、ギリシア語の「タウ（T）」と組み合わせることで十字架を表すこともしばしば行われた（Staurogram）。サン=ヴィクトール=ドゥ=カステルの祭壇では、この十字架の上に鳥（鳩）がいる。また左右両面には、円の中にギリシア十字が、そして裏面には大きな十字架が彫刻されている。こうした祭壇を使用することは、ラングドックではカロリング時代まで行われていた。L. Alègreによれば、もともこの祭壇は、古いサン=ヴィクトール=ドゥ=カステル礼拝堂の遺構にあったものが、恐らくは現地の牧人などによってそこから下に投げ落とされ、間道沿いに放置されそのまま忘れ去られていた。1863年に発見されてバニョル=シュル=セーズのコレージュの玄関に置かれ、その



30.1.1 Musée d'art sacré

後「レオン・アレーグル考古学博物館」に移されたが、今はここボン=サン=テスプリの宗教芸術美術館に展示されている。なおこのサン=ヴィクトール=ドゥ=カステル礼拝堂遺構について、その正確な場所や現在の様子などは、残念ながら筆者には確認できなかった。

この美術館には、もう1つ、セヴェンヌ地方で見つかった鉛製の丸い(円筒形の)洗礼槽(*cuve baptismale*)がある。11世紀終わりから12世紀にかけてのものと考えられている。11世紀以降の洗礼槽は、普通は石で作られたものが多いが、鉛製のもので、しかもこのように装飾の豊かなものは、ノルマンディーやイングランドでは見かけるものの、南フランスでは珍しいものである。5枚の湾曲したパネルを組み合わせられていて、それらのパネルには、円柱と半円アーチが形作る枠の中に、それぞれ十字架上のキリストや4人の福音書記者がいて、みな非常にユニークな表情をしている。キリストは十字架の上で左右に大きく腕を広げ、細い両足はきっちり揃えられている。痩せ衰えた胸のあばら骨が、キリストの苦痛をリアルに表現している。

Alègre (1871) p.396; Clément, P. (1993) pp.213-214; Girard (2000) pp.234-237; Labande (1902) pp.54-60; Lassalle (1970) p.23; Riche (2000) pp.112-113; *DEF*, IIc, pp.127-128; RIP.

### 30.1.2 サン=ポーレ=ドゥ=ケソン/サン=タニエス礼拝堂

#### (Chapelle Sainte-Agnès, Saint-Paulet-de-Caisson)

ボン=サン=テスプリから県道D343を西へ5キロでサン=ポーレ=ドゥ=ケソンに至り、その外周道路から200メートルほど西に進んだところで北へ向けて右折し、サン=タニエス礼拝堂に続く小径《*chemin de la Chapelle Sainte-Agnès*》をおよそ800メートルである。周囲をブドウ畑などに囲まれた開けた場所に、糸杉や松の木とともに、小ぶりだが端正な姿のサン=タニエス礼拝堂が建っている。この場所は、すぐ近くを古代から使われていた古道が通っていた。また周囲にはキリスト教が浸透する以前の墓地が発掘されているし、さらに礼拝堂の地下からはケルト時代のものと思われる井戸の跡などが見つかっていることから、古くから一種の聖域の役割を果たしていたようである。

もともとの古い聖堂の建物は、長方形のシンプルなものであったが、12世紀に五角形の後陣が付け加えられた。後陣のうち、中央の3つの面に外側に向けて隅切りされた細長い半円頭形の窓(採光部)が開けられている。彫刻装飾の類いは後陣部にも身廊の壁面にもまったく見られない。身廊の南側には、2つの出入口が付けられていて、これはかつてこの聖堂の南側に墓地があった時代に使われていたものであろう。そのうち西側の出入口の真上に、後陣と同じスタイルの窓が開けられている。また北側の壁にも、中ほどのところに南壁と同じような出入口が1カ所だけ開いている。この身廊北側の壁には後陣と接続するところに、厚さも幅も小さな扶壁が付けられている。西ファサードはいたってシンプルで、大きめの半円頭形のポルタイユ(扉口)が中央に開き、三角形の切妻のすぐ下に半円頭形の窓が開けられている。身廊東端部の上に立つ小さな方形の鐘楼(小尖塔が載る)は、17世紀のものである。

礼拝堂内部は、1976-1984年に行われた修復によって壁面なども白く上塗りされて、きれいに整えられている。身廊は2ベイからなる。各ベイの南北には、半円形の壁アーチが架けられている。後陣は、シンプルな方形のピラストルが並び、その上に5つの半円形のアーチが架かる。それぞれのアーチにはさらにその内側にヴシュールのようにアーチが付け加えられている。普通は身廊や後陣の外壁に付けられるロンバルディア帯が、後陣内部に付けられているような印象を受ける。これら内側のアーチの起拱点には、古くて素朴な人面のような彫刻が付けられている。



30.1.2 Saint-Paulet-de-Caisson

なお、サン=ポーレ=ドゥ=ケソンのコミュニオンには、シャルトルーズ（カルトジオ）会のヴァルボンヌ修道院（Chartreuse de Valbonne）がある。ボン=サン=テスプリから県道D23を西へおよそ9キロである。創建されたのは1204年で、時のユゼス司教ヴェネジャンのギヨーム（Guillaume de Vénéjan／在位1190-1204年）がシャルトルーズ会にこの土地を与えたことによる。それ以後、会の創始者であるケルンのブルーノの教えを守り、修道院としての活動は1901年まで続いた。現在は医療施設となっているほか、宿泊施設なども併設している。ヴァルボンヌで有名なのは、17世紀に作られた南北350メートルの大クロワトル（大回廊）で、その周囲に修道士たち個室が並んでいた。しかし最も古い部分は、入口から大クロワトルに至る途中にある小クロワトル（petit cloître）である。丸い井戸を中心に、尖頭アーチのアーケードが四方からそれを取り囲む小さな空間である。建設は13世紀初め、つまりロマネスクからゴシックへの移行期の頃とされているが、19世紀に大々的に修復されている。回廊の壁には、ヴァルボンヌの創建者であるギヨームの墓石が埋め込まれている。

Clément, P. (1993) p.389; Goury (1993) p.63; RIP.

### 30.1.3 カルサンノートル=ダム教会（Église Notre-Dame, Carsan）

ボン=サン=テスプリから県道D343を西へ4.5キロで南に折れ、県道D306を1キロ行くとカルサンの村に入る。ノートル=ダム教会はこの村のほぼ中ほどに建っている。教会前の広場の奥がメリー（村役場）である。

ガロ=ローマ時代には、今のカルサンの村の南およそ700メートルにある小丘の上に城塞（castrum）があった。12世紀、そこにはジェロー=ドゥ=モンテギュー一家が城（château de Montaigu）を所有していた。この城は14世紀には百年戦争の混乱や盗賊の襲撃、さらに土着農民の反乱などによって破壊され、15世紀には放棄された。一方10世紀頃には小集落であったカルサンには、次第に住民が増えてゆき、13世紀になると、ここから約5キロ南東のサン=タレクサンドル（Saint-Alexandre）の修道院に属するベネディクト派の小修道院が建てられ



30.1.3 Carsan

ユゼスのサン=テオドリ大聖堂の南側に建つフネストレル塔 (Tour Fenestrelle) をお手本にして、3 段構えになった鐘塔が建てられた。ユゼスのものは円塔であるが、カルサンのものは八角形で、上 2 層の各面には半円頭形の開口部が開けられている。

カルサンのノートル=ダム教会は、ロマネスク様式と言っても、建物全体は 15 世紀のものである。最も古い部分は、先にも触れたように、トランセプト北翼の小後陣の礼拝室である。聖堂外部を西側から見た時に、主後陣と、トランセプトに付けられた小後陣が並んでいる様子が、12 世紀の面影を強く感じさせる部分となっている。ただし現在は個人の住宅が隣接していて、後陣部全体を外から見渡すことはできない。西ファサードはいたってシンプルで、中央に半円頭形のポルタイユ、その上の切妻のすぐ下に大きな丸窓が開く。聖堂内部は 3 ベイからなる単身廊形式で、側壁には半円頭形の壁アーチが並ぶ。交差部の上はトロンプの上にクーポールが載る。主後陣は半円形で、3 つの大きな窓にはステンドグラスがはめられている。トランセプトの南北翼には、それぞれ東側に半円形の小後陣があり、これら 3 つの後陣には半ドームが架かる。

CAG, 30/2, pp. 300-301; Chapus (2011) p. 2; Chapus (2012) p. 2; RIP.

### 30.1.4 エゲーズ/テンブル騎士団のレプラ病院付属礼拝堂

#### (Chapelle de la Maladrerie des Templiers, Aiguèze) 遺構▲

ボン=サン=テスプリから県道 D6086 でサン=ジュスト=ダルデッシュへ向かい、そこから D290 をさらに西へ進むと、アルデッシュ県との県境となっている「アルデッシュ渓谷」(Gorges de l'Ardèche) となる。サン=ジュストからその D290 を約 16 キロ行ったところに、渓谷のパノラマを見下ろす「テンブル騎士団のバルコニー」(Balcon des Templiers) と名付けられた展望台が設けられている。眼下にはアルデッシュ川が谷をえぐるようにして大きく蛇行・湾曲す



の様子が見渡せるが、その蛇行部内側の小山の上に、12世紀から13世紀にかけてのロマネスク期に建設されたとされる「 Templar 騎士団のレブラ病院」の遺構が見える。「レブラ」とは、今で言うところのハンセン病などの皮膚病のことで、それを患った騎士団員の療養のために建てられたものと言われてきた。しかし19世紀より前の史料でそれを確認することは出来ず、また Nicola Clément らによる最近の考古学的発掘調査によって、11世紀あるいは12世紀初頭にまでさかのぼる古い聖堂の遺構も見つかったことから、今ではこの施設を最初に創建したのは Templar 騎士団ではないと考えられている（騎士団の創設は1119年、教皇による認可は1128年または1129年）。最初の創建は別としても、その後この場所が騎士団の、いわゆるコマンドリーとなった可能性も完全には否定することはできないのではあるが、しかしこの騎士団が1312年に解散となった後に騎士団員らがこの地に逃れてきたという19世紀に語られた伝承は怪しいものである。敷地の中にあつた墓地から見つかった人骨には、病気の痕跡を示すものは何も見つからなかったために、ここが「レブラ」すなわち皮膚病の治療施設であつたというのはいっそう疑わしい。騎士団のコマンドリーや病院でなければ、むしろ一般の修道院であつた可能性が高い。12世紀からは巡礼も多く訪れるようになり、13世紀頃までには新たに礼拝堂が建てられた（今はその遺構が残る）。しかしその後、1310年から1320年頃（あるいは遅くとも1350年頃まで）には放棄された。

この場所は、溪谷に沿って走る県道 D290 からはアクセスできない。ここからおよそ5キロ南のル・ガルン (Le Garn) の村からランドネ (山地ハイカー) のための山道を徒歩で片道数時間である（なおこの場所は、行政的にはエゲーズの村域の中に位置しているが、遺構自体はル・ガルンのコミューンが所有している）。約2500平方メートルの開けた場所に、井戸を囲む形で12-13世紀の礼拝堂、長方形の建物、南北がより長い建物の東壁（土台部分にアーチがアーケードとなって並ぶ）などが残っている。礼拝堂は身廊の南壁と半円形の後陣が残っており、後陣の東端と南側に、ロマネスク様式の半円頭形の窓が開けられている。後陣の内部には水平のコーニスが付けられていて、かつてはその上に半ドームが載っていた。同様に身廊南壁の内側にも水平のコーニスと、その上に架かっていた半円筒形トンネル・ヴォールトの一部が残されている。3ベイからなる身廊の内側にはベイを区切っていたピラストルも見ることができる。

Clément, N. (2013) p.73; Clément, N. (2016a) p.207; Clément, N. (2016b) pp.63-64.

### 30.1.5 サン=クリストル=ドウ=ロディエール/サン=クリストル教会

#### (Église Saint-Christol, Saint-Christol-de-Rodières)

パニヨル=シュル=セーズから県道 D980 を西へ11キロ進み、サン=ローラン=ドウ=カルノルから D141 を北へおよそ7キロでサン=クリストル=ドウ=ロディエールに至る。サン=クリストル教会は、村のほぼ中央に建っている。

建設は12世紀前半とされる。宗教戦争の後で行われた17世紀の改修の際に、五角形の後陣

およびその両側のトランセプトなどが建て替えられた。また 19 世紀には、後陣の外側に接する形で、方形の聖具室が追加された。

上部が三角形の切妻となった西ファサードは、村のメリー（村役場）と道を隔てて向かい合っている。ポルタイユ（扉口）はゴシック様式で、約 1メートルの基壇の上に 3 重の尖頭形ヴァシュールが架かり、一番内側には左右にシンプルな小円柱が立つ。タンパン部分は三つ葉型のトレーサリー装飾となっている。ポルタイユの上には小さな十字架がは



30.1.5 Saint-Christol-de-Rodières

め込まれ、さらにその上に丸窓が開けられている。身廊の外側には南に 1 つ北には 3 つの太くて強固な扶壁が並んでいるが、これは 17 世紀の改築時に付け加えられたものである。南側の壁の中ほどには、かつてこの聖堂の南側にあった墓地との間を行き来するための出入口のアーチの痕跡が残されている（今は埋められている）。このアーチのすぐ上に、ロマネスク期のものと思われる彫刻の施された石がいくつか埋め込まれている。3 本で一束となった組紐文様（ロマネスクでよく見られる角のとがったものや、角のない丸い形のもの、そしてパルメット状のものなど）がある。またかなり摩耗しているが、尻尾を上に向けて今にも飛びかかろうとしているポーズのライオンと思われる動物もいる。前足と後ろ足にはそれぞれ小さな穿孔（穴）が開けられている。こうした穿孔はプロヴァンスでよく見かけるものである。17 世紀に改築された五角形の後陣は、下半分が末広がりの方形状となっている。開口部（窓）などはまったく見られないが、中ほどの高さの所に、ロンバルディア帯の名残（アーチの連なり）が残されている。鐘を吊すベイが 2 つ並ぶ三角形の切妻形鐘楼は、19 世紀の新しいもので、南北方向に向けて建てられている。聖堂内部は交差部を含めて 3 ベイからなる単身廊形式である。主後陣は半円形で、17 世紀のトランセプトは半円形の小後陣（礼拝室）となっている。南側のそれの方が北側のものよりも少し大きい。身廊の天上に付けられた横断アーチを受けるピラストルには、水平のインポストがあり、そこにも組紐装飾が見られる。南北の壁アーチに付けられた小円柱の柱頭にはパルメット彫刻が施されている。

Clément, P. (1993) pp.389-390; *DEF*, IID, p.142.

### 30.1.6 サン=タンドレ=ドゥ=ロクペルテュイ/サン=タンドレ教会

#### (Église Saint-André, Saint-André-de-Roquepertuis)

パニョル=シュル=セーズから県道 D980 を西へ 19 キロ。サン=タンドレ=ドゥ=ロクペルテュイの村は県道を右（北）へ入って約 2 キロである。サン=タンドレ教会は村のほぼ中央、メリー（村役場）広場の西端に建っている。古くはヴォルク・アレコミク族のオッピドゥムがこの

村を見下ろす山の上にあった。8世紀にはサン=タンドレ教会とその周囲に集落が形成されていたようである。11世紀には集落全体が要塞化されるとともに、それまであった古い聖堂も現在のものに改築された。またその頃には、このサン=タンドレ教会はグダルグ修道院 (Abbaye de Goudargues [30.1.6]) の所有となっていた。



30.1.6 Saint-André-de-Roquepertuis

この聖堂は、時代の移り変わりと共に数々の改築・改修の手が加えられてきた。まず12世紀後半に古い聖堂の拡張工事が行われ、半ば要塞化された。その際、高さも加えられた

ために、簡素でありながら強固で厳めしい印象を見る者に与える。五角形の後陣の下部には、中央の3面に隅切りされた半円頭形の窓があるが、上部（つまり高さを加えられた部分）には、細長い銃眼が4つの面のそれぞれに付けられている。12世紀のこの拡張の際は、身廊部はまず北側の側廊が増築され、その後に南側の側廊が広げられた。身廊部の外壁には、南北共に力強い扶壁が付けられた。南壁の2つの扶壁の間には、今は埋められてしまったかつての出入口のアーチの痕跡が残っている。ただしそのアーチの頂部には「1620」年と刻まれている。西ファサードは、18世紀になって新古典主義様式で建て替えられたものである。左右対称に丸窓や半円頭形の窓が並んでいる。尖塔の載る四角い鐘塔はこれもまた新しいものである。

内部は最近の修復によって、きれいに上塗りされて整えられている。身廊は3廊式であるが、12世紀の要塞化によって高さが増えられたために、主身廊は南北幅の狭さに対して、尖頭ヴォールトとなったその天井の高さが目を引く。半円形の大きなアーチによって主身廊から区切られる2つの側廊も、その幅は決して広くはない。主後陣は外側は五角形であるが内部は半円形で、柱頭彫刻が付いた6本の小円柱が、5つの半円アーチの連なるアーケードを受け止めている。サン=ポーレ=ドゥ=ケソンのサン=タニエス礼拝堂 [30.1.2] の後陣の仕様と同じように、中央の3つのアーチには、さらにその内側にヴシュールのようにアーチが二重に付け加えられている。そしてその内側には隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が開けられている（今はステンドグラスがはめられている）。このアーケードの上には半ドームが載る。この半ドームおよび小円柱、そしてそれが乗る基壇部分などはすべて白く上塗りされているが、アーケードの中央の3面については、もとの石壁がそのまま残されていて、かつての雰囲気をも感じ取ることができるようになっている。後陣のこの半ドームのアーチの上から、高さが増えられた身廊のヴォールトの頂部までの高さがかかなりあって、今はそこに祭壇画が飾られている。CAG, 30/2, pp.563-564; Clément, P. (1993) pp.105-106; Labande (1902) pp.177-185.

### 30.1.7 グダルグ／グダルグ修道院付属ノートル=ダム=エ=サン=ミシェル教会

#### (Abbatiale Notre-Dame-et-Saint-Michel, Goudargues)

パニョル=シュル=セーズから県道 D980 を西へ 14.5 キロで南に入り、さらに 1.5 キロである。セーズ川 (La Cèze) 沿いであって、運河が街の中を流れ、プラタナスの並木の下にレストランや商店が並ぶ様子が「ガールのプチ・ヴェニス」などと呼ばれる。

もともとは 8 世紀 (または 9 世紀初め) に、カロリング朝フランク王国の重臣の一人であり、サン=ギレーム=ル=デゼール修道院の創建者としても知られるギヨーム・ドゥ・ジェローム (Guillaume de Gellone / またはギレーム・ドゥ・ジェローム Guilhem de Gellone、あるいはギヨーム・ダキテーヌ Guillaume d'Aquitaine) が、この地に僧院を創建したのが始まりとされる。さらに 9 世紀半ばになって、アニアヌ修道院に属する修道院 (Abbaye de Caseneuve) が、民族大移動期に放棄されたローマ時代のウィラの跡地に新たに建てられた。この後、グダルグはアニアヌのみならず、アルル大司教 (10 世紀)、クリュニー修道院 (11 世紀半ば)、ラ・シェーズ=デュ修道院 (11 世紀末) などと次々入れ替わりに付属・協力関係を結んだ。そのようなわけで Pierre A. Clément によると、グダルグの建築にはプロヴァンス (アルル)、ブルゴーニュ (クリュニー)、オーヴェルニュ (ラ・シェーズ=デュ)、そしてラングドック (アニアヌ) からの要素がそれぞれ反映されてきたのだと言う。しかし 12 世紀には結局アニアヌが主導権を握ることとなった。12 世紀中頃、アニアヌの修道士たちは、新たに修道院と付属聖堂の建設を行った。現在残るグダルグの後陣部分は、この時のものである。16 世紀と 18 世紀にはヴォールトが崩落し修復された。また 19 世紀 (1823 年) にも本格的な再建・修復工事が行われている。

西ファサードは、後代の修復の手がかなり入っている。上部は三角形の切妻になっていて、その下に大きな丸窓、そして一番下に近代になって作られた新しいポルタイユ (扉口) が開く。半円形のヴェシュールを左右で小円柱が受ける。タンパンにはギリシア十字が彫刻されている。このポルタイユの左右には、尖塔を戴く方形の高い塔が立つ。向かって左側 (北側) の塔の方がわずかに大きい。この左側の塔の上部には、大天使ミカエル (サン=ミシェル) の彫像が置かれ、右側 (南側) の塔の同じ場所には聖母のマリアの彫像が置かれている。西ファサードにおいて、この左右の塔の土台部分の石積みが、12 世紀の建設当時のものである。城塞建築のように厳めしい印象を与える 12 世紀の五角形の後陣は、後の時代に高さが加えられている。増築部分は、石積みの違いでそれと分かる。中ほど少し下のところに小さめの半円頭形の窓が開く。一番上には半円形の窓が開けられている。五角形のうち、中央の面はその両側の面よりも



30.1.7 Goudargues

幅が狭くなっている。

聖堂内部は少なくとも身廊部分については、16世紀以来繰り返されてきた修復工事によって綺麗に整えられていて、古さはまったく感じられない。単身廊形式で、かつては大きなベイ2つからなっていたが、現在は4ベイとなっている。天井は横断アーチによって区切られた半円筒形トンネル・ヴォールトで、その高さはおよそ18メートルである。身廊の南北両側には、尖頭形の壁アーチが並ぶが、このアーチは奥行きが1.6メートルあり、それ自体が小さな礼拝室を兼ねたものとなっている。南側の西から2つめのアーチの内側には木製のキリスト受難の板絵彫刻が並べられている。身廊の東には凱旋アーチをへて内陣（南北両側に半円頭形の窓が開く）、そして最も古い12世紀ロマネスク期の後陣が残されている。外部は五角形であるが、内部は半円形で、5つの面から構成されている。両端部は立溝の付けられた方形のピラストル、そしてその内側は4本の細長い壁付き円柱によって区切られており、それぞれの面の下半分には半円頭形の壁アーチが並ぶ。それらのアーチの起拱点にはインポストが付けられている。5つの面の上部、すなわち後陣の上に架かる半ドームが立ち上がるコーニスのすぐ下には、1つの面に2つずつ小アーチがアーケードとなって並んでいる。それはあたかもロンバルディア帯のごとくである。4本の壁付き円柱のうち、左右両端のものには、柱頭彫刻が付けられている。向かって左側のもは、吹き上がる植物の葉の並ぶ環状部分とパルメット文様の冠板の間の2つの角に、聖杯から水を飲む2羽の向かい合った鳥（鳩）が彫刻されている。また向かって右側のものには、大きな実をつけるブドウのつるの彫られた冠板の下に、座っているかのようにも見える人物が一人いて、その両側をワシに挟まれている。後陣の中央の面には、半円頭形の小さな窓が開けられているが、その窓は内側に向けて大きく隅切りされ、しかも半円アーチ部分が段々状のヴェシュールのようにになっている。これは例えばジェヴォーダン（今のロゼール県）のル・ボンビドゥーにあるサン＝フルール教会 [48.8.16] にも見られたものである。この半円形の後陣の床面の下には、壁に沿って古い土台が発掘されていて、手すり越しにそれを見ることができるようになっている。この後陣の上に架かる半ドームには、格間（格子）のトロンプレイユ（だまし絵）が描かれているが、これはもちろん新しいものである。

グダルグでは、聖堂の南側に、長さ32メートル、幅12メートルという大きな「聖堂参事会室」（salle capitulaire）と呼ばれる建物が残されている。これはかつてのクロワトルの名残であるが、恐らくは修道士たちの大食堂（réfectoire）であったと思われる。天井は尖頭形のトンネル・ヴォールトで、ゴシック期に入ってから建てられたものである。現在は、地元芸術家などの展覧会の他、さまざまな文化イベントに利用されている。

なお、グダルグにおいて最初に創建された古い修道院の名残をとどめる「カスヌーヴのノートル＝ダム礼拝堂」（Chapelle Notre-Dame de Caseneuve）は、上で見たノートル＝ダム＝エ＝サン＝ミシェル教会のすぐ南30メートルほどの所に建っているが、現在は個人所有の住居に改造されていて、見学などはできない。外壁も、筆者が訪れた2005年には一面が藁で覆われていてまったく見ることができなかった。

またグダルグの北のサン＝ミシュレ地区にあったというカロリング期にまでさかのぼるサン＝ミシュレ礼拝堂の遺構についても、筆者には正確な場所は確認できなかった。

Clément, P. (1993) pp.101-105; Labande (1902) pp.126-131; GV; RIP.

### 30.1.8 コルニヨン／サン=ソヴール=ドウ=サン=ジェリー礼拝堂

#### (Chapelle Saint-Sauveur-de-Saint-Gély, Cornillon)

バニョル=シュル=セーズから県道 D980 を西へ 12 キロほど進んだところで南に折れて D220 に入るとほどなくサン=ジェリー (Saint-Gély) の集落である。サン=ソヴール礼拝堂はこの集落のすぐ東にある小山の上にあるので、その集落の南の端から« Chemin Saint-Sauveur » の標識に従って細い道を進む。およそ 800 メートル登ると、目的の礼拝堂に着く。セーズ溪谷を見渡すパノラマが美しい場所である。

建設は 12 世紀とされる。テンプル騎士団の療養院の跡地に建てられたという伝説もあるが、定かなことではない。塔頂部が三角形の鐘楼を戴く西ファサードは、半円形アーチが架かるポルタイユと、中ほどの高さのところ方形の窓が開くだけのシンプルなものである。左右両側に末広がり強い強固な扶壁が付くので、西ファサード全体が台形となっている。同様の仕様の扶壁は身廊の南壁にも 1 つ付けられている。後陣は五角形であるが、中央の面の左右の角が丸みを帯びているので柔らかい感じがする。単身廊形式の聖堂内部は、使用感はないものの、古いロマネスク期の雰囲気をよく伝えるものとなっている。身廊の南北両側には半円形の壁アーチが並ぶ。後陣には半ドームのすぐ下あたりまで高さのある半円アーチが 3 つアーケードとなって並んでいる。ただし、摩耗が進んでいて中央のアーチは輪郭がはっきりしない。聖堂内部の今後の修復工事が待たれるところである。

Martinez (2015) pp.199-200.

### 30.1.9 ラ・ロック=シュル=セーズ／城塞礼拝堂

#### (Chapelle castellane, La Roque-sur-Cèze) privée▲

バニョル=シュル=セーズから県道 D980 を西へ 10 キロほど進み、南に折れて D166 を 1.5 キロ。セーズ川に架かる「カール・マルテルの橋」と呼ばれる中世の橋を渡ると、ブドウ畑に囲まれた小山の上に、城を中心の家々が集まったラ・ロック=シュル=セーズに至る。この城は 12 世紀に建設されたものであるが、14 世紀の百年戦争の混乱の中で傭兵たちによって荒らされ、さらには 16 世紀の宗教戦争の際にプロテスタント勢力によって大きな被害を受けた (特に 1573 年)。その後、幾度も所有者が変わって住まわれていたが、19 世紀半ばに放棄されて廃墟化した。1960 年代になって修復工事が行われ、現在に至っている。



30.1.9 La Roque-sur-Cèze

城の礼拝堂も、建設は12世紀である。1156年にユゼス司教が献堂式を行っている。時代と共に城は破壊と修復が繰り返されてきたが、この礼拝堂の方は幸いにも大きな被害は受けてこなかった。1883年に集落の下に新しい教会が建設されるまで、教区教会としての役割を果たしていた。小さな単身廊形式の聖堂で、西ファサードに方形の扉口、東側には三角形の切妻の鐘楼が立ち、その下に半円形のロマネスク様式の後陣が付く。切り整えられた石による美しい石積みである。中央には半円頭形の小さな窓が開けられている。また後陣上部の持ち送りにはギザギザの歯車形の帯（フリーズ）が巡っている。この礼拝堂は、付属する城塞と共に個人所有のもので、公開はされておらず見学することはできない。

ML, 2013.5.3; Werth (2013) pp.96-97; RIP.

### 30.1.10 サン=タンドレ=ドレラルグ/サン=タンドレ教会

(Église Saint-André, Saint-André-d'Olérargues)

パニョル=シュル=セーズから県道 D6 で西へ約 7 キロでサン=マルセル=ドゥ=カレイレ (Saint-Marcel-de-Careiret) となり、そこから D23 を北へ 2.5 キロである。

10 世紀半ばには、ブルゴーニュからクリュニー修道院の修士たちが南フランスのローヌ川流域のこの地域に進出を始めていたが（ポン=サン=テスプリ [30.1.1] など）、ここサン=タンドレ=ドレラルグでも、彼らクリュニーの修士たちによって 11 世紀にサン=タンドレ教会が建てられた。16 世紀の宗教戦争の際にはプロテスタントによって荒らされるなど被害を受けた。17 世紀には聖具室が、そして 19 世紀以降、側室や司祭館、新しい鐘塔などが付け加えられている。

県道 D23 に面した後陣は半円形で、大きさ・形が不揃いな石が不規則に積まれている。半円頭形の窓が中央に開けられている。後陣の向かって左（南）側には、19 世紀（または 18 世紀）の方形の聖具室が付けられており、西側壁面にはゴシック様式の尖頭形の窓が開けられている。この聖具室から聖堂南側に付けられた側室（これにも尖頭形の窓が開けられている）の方に回ると、聖堂の入口（半円頭形）があり、その斜め右上にはロマネスク様式の尖頭形で細長い窓がある。西ファサードは身廊の東西軸に対して少し斜めになっていて、かつての入口の名残であるアーチが残されている。西ファサードの上に立つ小さな鐘塔は 19 世紀後半のものである。聖堂内部は 2 ペイからなる単身廊形式で、天井は半円筒形トンネル・ヴォールトとなっている。後陣は半円形で、その上には半ドームが架かっている。

なお、サン=タンドレ=ドレラルグの西 5 キロのところ（ヴェルフィユ Verfeuil のコミューン内、県道 D6 から D340 に入って西へ約 2 キロ）に、かつてシトー修道会に属したヴァルソーヴ修道院 (Abbaye de Valsauve) がある。現在残る建物の古い部分は 13 世紀のものであるが、個人所有のドメーヌに建て替えられており、私有地の中にあるためにアクセスできない。

Web : Site officiel de la commune de St-André d'Olérargues.

### 30.1.11 サン=ジェルヴェ/サン=ジェルヴェ=エ=サン=プロテ教会

#### (Église Saint-Gervais-et-Saint-Protais, Saint-Gervais)

パニヨル=シュル=セーズから県道 D980 を西へ 5 キロである。村は県道から北に少し入ったところであって、サン=ジェルヴェ=サン=プロテ教会はこの村のほぼ中央に建っている。

古代にあったジュピター神殿の跡に、11 世紀後半に建てられたとされる。中世には聖堂の南側は墓地となっていた。14 世紀以降、百年戦争の混乱や宗教戦争などで被害を受けて破損が進んでいたが、19 世紀（1836 年以降）に大幅に改修・改築が行われた。もともとは単身廊形式であったものに、南北の側廊を増築し、同時に主身廊自体も高くされた。西ファサードも新しく建て替えられたもので、三角形の切妻の下の半円アーチ、そしてタンパン部分に植物のつるに囲まれたギリシア十字が彫刻されたポルタイユなど、これらはすべて 19 世紀のものである。南側の側廊の外壁には、中ほどの下部に古代の石棺のフリーズの一部や、碑銘が彫刻された古代の四角い石版が埋め込まれている。石棺のフリーズは、19 世紀に聖堂が改修された際に後陣の下から発見されたものである。そのまま西側へ進むと、この聖堂で唯一建設当時の面影を今に伝える後陣となるが、もともと後陣中央（東端）にあった窓は埋められてしまっており、その両側に大きな窓が新たに開けられている。南側の側廊と後陣の間には 18 世紀の方形の塔がある（1956 年に落雷で破損したが修理された）。

聖堂内部は、現在は 3 廊式である。3 ベイからなる高さのある身廊には半円筒形トンネル・ヴォールトが架かり、半円形の横断アーチがベイを区切っている。横断アーチはヴォールトの起拱点まで立ち上がる壁付き円柱が柱頭彫刻を介して受け止める。南北の側廊は、主身廊よりも天井が低く、交差ヴォールトとなっている。主身廊と南北の側廊は、半円アーチとピアによるアーケードで隔られている。丸窓の開けられた凱旋アーチを介して身廊のヴォールトから一段低くなって東に接続する後陣は、この聖堂内部においてロマネスク期の状態がかなり保存されている部分である。形は半円形の平面プランで、少し高さのある 7 つの半円形小アーチが連なるアーケードである。左右両端において、無装飾の四角い柱頭を介して小アーチを受けるのは方形のピラストルであるが、その内側の 6 本の小円柱は、かつてここにあった古代の神殿から再利用されたものと言われる。さらにそのうちの中央にある 4 本の小円柱には柱頭彫刻が付けられている。素朴な形のアカンサスに、ロゼット（丸い花卉）や人間の顔などが彫刻されている。先にも触れたように、本来この後陣の中央のアーチの中に開けられていた窓は今埋められおり、その左右両側のアーチの中に、新たに窓が開けられている。なおこの後陣の意匠は、ヴェゾン=ラ=ロメヌ（ヴォークリューズ県）のノートル=ダム=ドゥ=ナザレ大聖堂のものとの類似性が指摘されている。



30.1.11 Saint-Gervais

CAG, 30/2, p.612; Clément, P. (1993) p.388; Labande (1902) pp.193-195; RIP.



Web : Site officiel de la Mairie de Saint-Gervais.

### 30.1.12a ヴェネジャン／サン＝ジャン＝バティスト礼拝堂

#### (Chapelle Saint-Jean-Baptiste, Vénéjan)

バニョル＝シュル＝セーズから国道 N86 を北へ 2 キロのところまで県道 D148 を東へ入る。さらに 2.5 キロでヴェネジャンの村である。その中ほどにあるメリー (村役場) から「Grand Rue」を進み、新しいサン＝ジャン＝バティスト教会の前を過ぎて、さらに村の南東にある小山へ向けて「chemin du Jeu de Mail」をおよそ 600 メートル登ると、ロマネスク様式のサン＝ジャン＝バティスト礼拝堂に至る。

この地はガロ＝ローマ時代には「Veneianum」と呼ばれていた。11 世紀になるとヴェネジャンの領主が城塞 (カストルム) を建設し、この聖堂はそれに付属する城塞礼拝堂 (chapelle castrale) であった。実際、1987 年の発掘調査で、身廊の南側に 10-11 世紀頃のものと思われる方形の塔の土台部分の遺構が見つまっている (今も聖堂の南にそのまま残されている)。その後、ヴェネジャン出身でユゼス司教となったギヨーム (Guillaume de Vénéjan / 在位 1190-1204) はヴァルボヌのシャルトルーズ修道院を創建している [30.1.2]。16 世紀には、この地の領主はアンスジューヌ家であったが、1595 年、時のヴェネジャン領主ジャンヌ・ダンスジューヌ (Jeanne d'Ancezune) とグリニャン伯でカステラーヌ＝アダマル家のルイ (Louis de Castellane-Adhémar) がこの教会で結婚している。その後 1624 年から未亡人となっていたジャンヌは、多くの子供に先立たれていたこともあってか、1647 年の遺言の中で、この教会に一族の墓所となる礼拝室を付け加えるように書き残している。すなわち身廊第 1 ベイの北側の礼拝室である。彼女自身は 1660 年に亡くなるが、その礼拝室が完成したのはその後のことであった。18 世紀にはラファール家がこの地を所有した。20 世紀に入ると、村の中に新しく教区教会が建てられたことによって、サン＝ジャン＝バティスト礼拝堂の方は使われなくなり、放棄されたまま半ば廃墟化してしまった。あらためて修復工事が行われたのは、1969 年のことである。

現在残る聖堂は、11 世紀の城塞礼拝堂に代えて 12 世紀にロマネスク様式で再建されたもので、もともとは 2 ベイからなる単身廊に後陣が付くだけの小さなものであった。13 世紀後半に 2 つのベイのうち、東側のベイの南に方形の小さな礼拝室が造られた。14 世紀になって西側のベイのさらに西に、新たなベイと西ファサード、そして西ファサードの上の鐘楼が増築された。現在の西端のベイと中央のベイの間の石積みの違いが聖堂外部の南北の壁面に見て取れる。後陣は半円形で



30.1.12a Vénéjan

中央に隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が開けられている。ロンバルディア帯などの装飾はない。後陣外部を巡るコーニスの上にはさらに高さ加えられて屋根となっている。内部は都合3ベイからなる単身廊形式で半円筒形トンネル・ヴォールトが架かる。身廊の南北には二重の半円形壁アーチが並び、ヴォールトの起拱点をコーニスが巡る。東側の2つのベイを区切る半円形の横断アーチはピラストルとなるが、途中で止まり床までは降りてこない。凱旋アーチの東は後陣となり、半ドームが架かる。先にも触れたように、東端のベイの南には13世紀の礼拝室があり、さらに北側には17世になってアンスジューヌ家のジャンヌ (Jeanne d'Ancezune) が造らせた少し大きめの礼拝室がある。これら南北の礼拝室は、あたかもトランセプトのような形となっている。ともに天井は交差リブ・ヴォールトである。14世紀に増築された西端のベイの上には、16世紀にトリビューン (階上席) が設けられた。天井は太い4分交差リブ・ヴォールトで支えられている。このトリビューンの上には、南側の壁に沿って付けられた石の階段で上るようになってい

る。聖堂内部の壁面やピラストル、横断アーチなどには彩色されたフレスコ画が描かれている。とりわけ注目すべきは、1984年に行われた修復工事の際に見つかった、後陣の半ドームに描かれたキリストで、頭には光輪が付けられており、その下には4人の福音書記者が並ぶ。凱旋アーチの向かって右寄りのところには、大きくて丸い「運命の輪」が描かれている。これらのフレスコ画は14世紀(1320-1330年頃)のものだとされ、恐らくはアヴィニオン教皇庁の枢機卿でヴェネジヤンの領主でもあった Napoléon Orsini (1263-1342) が描かせたものと言われている。

なお聖堂の南側にはかつて墓地があり、現在でも後陣の東にいくつかの古い石棺が並べて置かれている。

BM (Saint-Jean-Baptiste de Vénéjan) ; Clément, P. (1993) p.375; Labande (1902) pp.225-227; RIP.

### 30.1.12b ヴェネジャン／サン=ピエール礼拝堂 (Chapelle Saint-Pierre, Vénéjan)

ヴェネジャンから県道 D148 を2キロほど北へ向かい、県道 D138 と合流する地点の150メートルほど手前で«*impasse de Saint-Pierre*» の標識に従って北に向かう小道に入り、およそ250メートルである。周囲はブドウ畑となった丘陵地で、糸杉その他の樹木に囲まれて、小さいが古くて味わい深いロマネスクの聖堂が、訪れる者を暖かく迎えてくれる。

文書史料にその名が見つからないこともあって、建設年代については、はっきりしたことは分かっていない。サン=サテュルナン=デュ=ポール (現ポン=サン=テスプリ) に進出したクリュニー修道会によって、11世紀末から12世紀前半くらいに建設されたのではないかと考えられている。身廊、扶壁、後陣などに石積みの違いが複数見られることから、異なる時期に何度か建設工事が行われたとする見方もあれば、一度の建設に際して異なる仕様が取り入れられたとする見方などさまざまである。建物は長方形の小さめの身廊と半円形の後陣だけのシンプルな作りである。身廊の外壁には上部が斜めに切られた力強い扶壁が南北それぞれに3つずつ付

けられていて、南側にだけ扶壁の間に隅切りされた半円頭形の細長い採光部（窓）が2カ所開けられている。聖堂への入口（半円頭形のアーチと無装飾のタンパン）も南壁の西側のベイに付けられている。後陣は上部にロンパルディア帯が巡る。小さなアーチが3つで1組となってアーケードを作り、その小アーチ3つごとに、平たい方形の扶壁（ピラストル）が地面まで下りている。後陣の中央には隅切りされた半円頭形の細長い窓が開けられている。身廊東端の上には方形の鐘楼が立っている。礼拝堂本体よりは多少年代が新しいものと考えられている。4面すべてに半円頭形の開口部があり、西面以外の3つの面では小円柱がそれら開口部の中でアーチを支えており、それぞれ柱頭彫刻が付けられているが、とりわけ北面と東面のそれは、アカンサスやパルメットなどの植物文様となっている。こうした礼拝堂の建物全体の印象は、ここからおよそ17キロ南にあるトレスクのサン=マルタン=ドゥ=ジュサン教会（Église Saint-Martin-de-Jussan, Tresques）によく似たものとなっている。建設時期もほぼ同じである。

聖堂内部は半円形の横断アーチで区切られた2ベイからなる単身廊形式で、天井は半円筒形トンネル・ヴォールトとなっている。身廊の側壁には南北両側共に半円形の壁アーチが付けられている。後陣は半円形で、半ドームの下は5つの小アーチが連なるアーケードとなっており、それを受ける柱は、左右両端では方形のピラストル、その内側は壁付きの小円柱である。注目すべきは身廊の東側のベイの壁アーチを受けるピラストルの柱頭彫刻（インポスト）および、後陣（内陣）を取り囲む小円柱に付けられている柱頭彫刻である。まず身廊の東側のベイにある壁アーチを受けるピラストルには、2つの面に四足獣（北側）と2つの渦巻きが組み合わされた線刻文様（南側）が見られる。この後者は、「フクロウ」の顔を表したものであるとする見方もある。後陣の4本の小円柱には、脚が長くてクチバシの尖った鳥（ニワトリか）と四つ足のサラマンデル、同心円を描いて回転する大きくて丸い渦巻きが2つあり、さらに2人の人が肩を組んで並び左右に腕を広げる「オランス（オラント）」すなわち「祈る人」がいる。この4つの柱頭彫刻の図柄は、クリュアス大修道院付属のサント=マリー教会（Cruas/現アルデッシュ県）の地下クリプトにおいて見られる柱頭彫刻と酷似している（ただしクリュアスの「オランス」は1人だけである）。クリュアスの地下クリプトは11世紀後半から12世紀にかけてのものであり、ヴェネジャンのサン=ピエールも同時期と思われるが、その不思議なモチーフは、プレ・ロマネスク以前のカロリング期の雰囲気の色濃く伝えるものである。なお、このサン=ピエール礼拝堂は、現在は個人所有（privée）である。

中川（2013）pp.48-49; BM（Saint-Pierre de Vénéjan）；Clément, P.（1993）pp.214-216; Labande（1902）pp.228-232.

### 30.1.13a サン=テティエンヌ=デ=ソール/サン=テティエンヌ教区教会

#### （Église paroissiale de Saint-Étienne-des-Sorts）

サン=テティエンヌ=デ=ソールは、ヴェネジャンから県道D138を通過して約6キロ、あるいはバニョル=シュル=セーズからだとやはりマルクール経由で県道D138を13キロである。いずれにしてもローヌ川に出るので川沿いに行けばほどなく着く。ここは古くから渡し船の往来

するにぎやかな場所であった。

サン=テティエンヌ教区教会は、ボン=サン=テスプリのように、後陣側がローヌ川に面する形で建っている。もとはこの地にあったプリウレ（小修道院）の付属聖堂で、建設は12世紀である。その後陣は五角形で、比較的小さめのトランセプトが南北に付いている。後陣はその西側に住宅が直接建っていて正面からその全体は見えない（そのおおよその姿を見るにはローヌ川の対岸に行かなくてはならない）。トランセプトは、特に南側のものに、隅切りされた半円頭形で細長い窓が残されている。この後陣とトランセプトがロマネスク期（12世紀後半）の古い部分で、それ以外の身廊、交差部の上に立つ鐘楼とその上の尖塔、そして西ファサードは19世紀後半に再建された新しいものである。内部もそのようなわけで身廊部分のごく新しいが、古い後陣は外部と同じ五角形である。普通、後陣には平たい（奥行きのあるあまりない）アーチの連続するアーケードなどが見られることが多いが、ここサン=テティエンヌ=デ=ソールでは、珍しいことに五角形の各面に奥行きのある半円形の小後陣が付けられているのである。そしてその小後陣にはそれぞれコーニスをして小さな半ドームが架けられている。さらに五角形の後陣全体に水平のコーニスが巡り、その上に大きな半ドームが架けられている。交差部の上にはクーボールが載るが、これは古いものではない。交差部の南北に付けられたトランセプト（翼廊）は、身廊とともに高さがあり、半円筒形ヴォールトが架かる。西端には石造りの2階席が設けられている。

Clément, P. (1993) pp.219-220; *DEF*, IIc, p.142; Labande (1902) pp.186-190; Morel (2007) p.59.

### 30.1.13b サン=テティエンヌ=デ=ソール/サン=ピエール礼拝堂

#### (Chapelle de Saint-Pierre, Saint-Étienne-des-Sorts)

サン=テティエンヌ=デ=ソールのサン=テティエンヌ教区教会からローヌ川沿いに県道D138を北へおよそ300メートル進み、左（北西）に折れて「rue St-Pierre」を小高い丘に向けて500メートルほど登るとサン=ピエール礼拝堂に至る。ローヌ川を見下ろす場所に、やはり中世に造られた方形の監視塔と並んで建っている。11世紀後半または11世紀末頃に、サン=サテルナン=デュ=ポール（後のボン=サン=テスプリ）にあったベネディクト派修道院（クリュニー修道会）の修道士たちによって建てられたものとも言われるが、それを証する史料がないので確かなこととは言えない。L-H. Labandeによれば、隣り合う方形の塔が建設されたのは、礼拝堂よりも1-2世紀ほど後のことであるという。



30.1.13b Chapelle Saint-Pierre de Saint-Étienne-des-Sorts

サン=ピエール礼拝堂は、ベイが1つだけの身廊に半円形の後陣が付いたごく小さなもので、東西の長さは7メートル、南北の幅は約3メートルである。鐘楼はない。身廊ならびに後陣の外壁は、多くの部分が不規則な形の石積みで、足場を組む際に木を差し込む穴 (trou de boulin) がいくつも開けられている。半円形の後陣の中央には細長い窓が開けられていて、その枠を型取る石には、窓の頭部に据えられたリントルも含めて、石切職人の刻印が刻まれている。「W」あるいは横倒しになった「B」、半円形の鎌の形をした「G」などである。西壁に付けられていた入口は破壊されていて大きな穴が残るだけである。三角形の切妻となった西壁の上部には小さな開口部があり、後陣のものと同じように大きめの石が窓枠を組んでいる。その開口部の上半分は内側が半円アーチとなった大きめのリントルである。聖堂自体が半ば廃墟化しているので、その内部も打ち捨てられた様子となっている。わずかに尖頭形となったヴォールトは、ロマネスク期以降に架け替えられたものと思われる。半円形の後陣に開けられた半円頭形の窓は、内側に向けて隅切りされている。後陣の上部には三重の横筋が付けられた水平のコーニスがり、その上に半ドームが架かる。この半ドームの石組みは、切り整えられた石がきれいに組まれたものである。

*DEF*, IIc, p.143; Labande (1902) pp.190-192.

略記号と参考文献

*BLM* : *Bulletin monumental*.

BM : Base Mérimée.

*BSL* : *Bilan scientifique Languedoc-Roussillon*.

*BSO* : *Bilan scientifique Occitanie*.

*CAG* : *Carte Archéologique de la Gaul*.

*DEF* : *Dictionnaire des Églises de France*.

GV : Guide de Visite.

*ML* : *Midi Libre*.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

(なお各聖堂のビブリオグラフィでは、文献などはアルファベット順に、またGVとRIPは最後に記した)

瀬原義生 (1993) 『ヨーロッパ中世都市の起源』 未来社。

中川久嗣 (2013) 「南仏アルデッシュ県ローヌ川西岸流域の中世ロマネスク聖堂について」

『文明』第18号、東海大学文明研究所、所収。

Alègre, Léon (1871) : « Autel roman déposé au musée de Bagnols (Gard) », in *BLM*, 1871, pp.396-399.

Chapus, André (2011) : « L'église Notre Dame de Carsan », in *Les échos de Carsan*, *Bulletin municipal de la commune de Carsan*, no.15, p.2.

- (2012) : « Le prieuré de Carsan », in *Les échos de Carsan, Bulletin municipal de la commune de Carsan*, no.18, p.2.
- Clément, Nicolas (2013) : « Aiguèze, La Maladrerie des Templiers », in *BSL*, l'année 2012, p.73.
- (2016a) : « Aiguèze (Gard) . La Maladrerie des Templiers », in *Archéologie médiévale*, no.46, p.207.
- (2016b) : « Aiguèze, Maladrerie des Templiers », in *BSO*, l'année 2015, pp.63-64.
- Clément, Pierre A. (1993) : *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- Girard, Alain (2000) : « La Chapelle du Prieuré St-Pierre de Pont-St-Esprit », in *CAF (1999, Gard)* , pp.213-225.
- Goury, Jacques (1993) : « Saint-Paulet-de-Caisson, Chapelle Sainte-Agnès » , in *BSL*, l'année 1992, p.68.
- Labande, Léon-Honoré (1902) : *Études d'histoire et d'archéologie romane. Provence et Bas-Languedoc, 1. Églises et chapelles de la région de Bagnols-sur-Cèze*, dessins par Léon Alègre, Avignon, François Seguin, Paris, Picard.
- Lassalle, Victor (1970) : *L'influence antique dans l'art roman provençal*, Paris, Éditions E. de Boccard.
- Martinez, Georges (2015) : *Le Gard*, Paris, Société des Écrivains.
- Morel, Jacques (2007) : *Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*, Lyon, Éditions Autre Vue.
- Riche, Denyse (2000) : *L'ordre de Cluny à la fin du moyen âge: Le vieux pays clunisien, XIIe-XVe siècles*. Saint-Étienne, Université de Saint-Étienne.
- Werth, François (2013) : *Le patrimoine caché et méconnu en Languedoc-Roussillon*, Aix-en-Provence, Ouest-France.

Web-site

Mairie de Saint Gervais (<https://mairie-stgervaisgard.fr/>) 2020.6.1 アクセス

Site officiel de la commune de St-André d'Olérargues

(<http://www.mairie-saintandredolerargues.fr/>) 2020.6.1 アクセス

La Tour de Fontanilles, Castrum de Guilhem de Fontanilles

(<http://latourdefontanille.blogspot.com/>) 2020.4.1 アクセス

BM : Base Mérimée. (<http://www.culture.gouv.fr/culture/inventai/patrimoine/>)

2020.4.1 アクセス